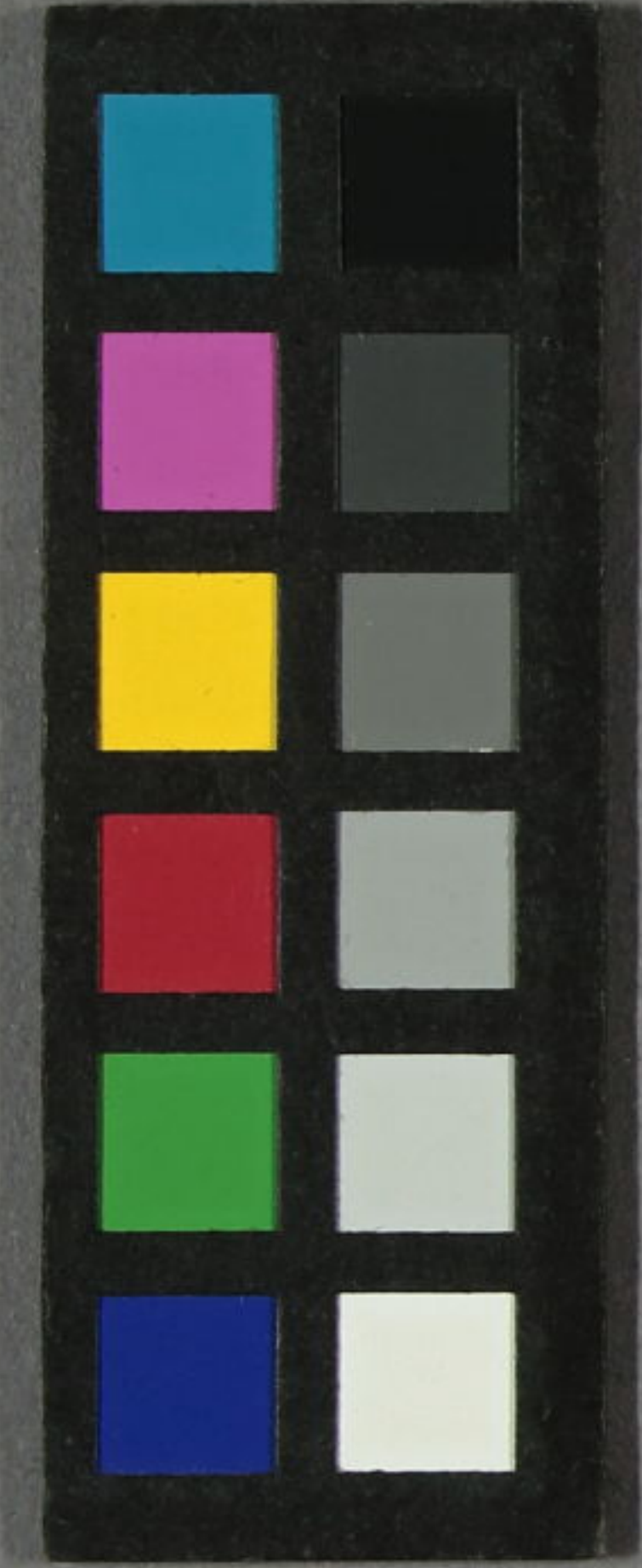


龜戸干句

上



五口の女はさうさうとて一匹の猿泣の種も
 一きつて大層の梅もまを結ぶとて車も
 けちちと取らぬといふ日ひひひひひひひ
 こころで清き風は清き風のうらやま
 思ひたうも神もていふことかたかた
 五匹の猿泣もさうさうとて一匹の猿泣の種も

清き結ぶきけとて一匹の猿泣の種も
 一きつて大層の梅もまを結ぶとて車も
 けちちと取らぬといふ日ひひひひひひひ
 こころで清き風は清き風のうらやま
 思ひたうも神もていふことかたかた
 五匹の猿泣もさうさうとて一匹の猿泣の種も

かゝるものぞいふ事なすもぬりあ
言ふ事板もあつての人のいふ事
浦のまも事もあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
浦のまも事もあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて

古くはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて
あつてはあつてはあつてはあつて

花をみるよし さらば太平のやうなるものありしを
 とらふもの 果して二十年前とせば 十人 洲に
 あり 無きやうなり 世にせむも 人のかこむ
 梅子の信と 日向のちねと 阿彌六二言と
 しよすものたりし 雲静止を 見るに
 すまやと 五月六日の 阿彌と 聖像の
 内前と するく 一なる 香殿 住持を
 先三巻をもち むす八員 先ず 螺貝八翁乃

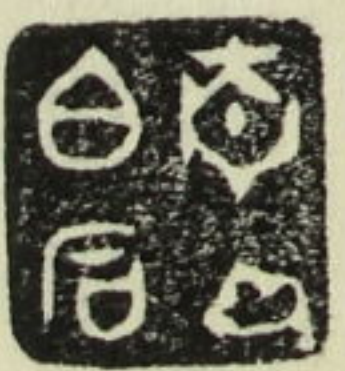
忌日ぬきハ 中百韻を 作り 次月乃 百三首 貞
 出らうし といふ 一と あり

四時より 平ら月三と といふ 瀧戸社 願中
 齋し して 一と あり 中酒 亦 鑑を
 せぬ 社に して 祝詞を 奏し
 恙なく 吟し 一と あり 拙筆 八三 素菴 成雅
 筆 今舎 招致の やう 也 何と せむ 一と あり 八
 十 余へ 中 詠草 八 巻 齋の 一と あり

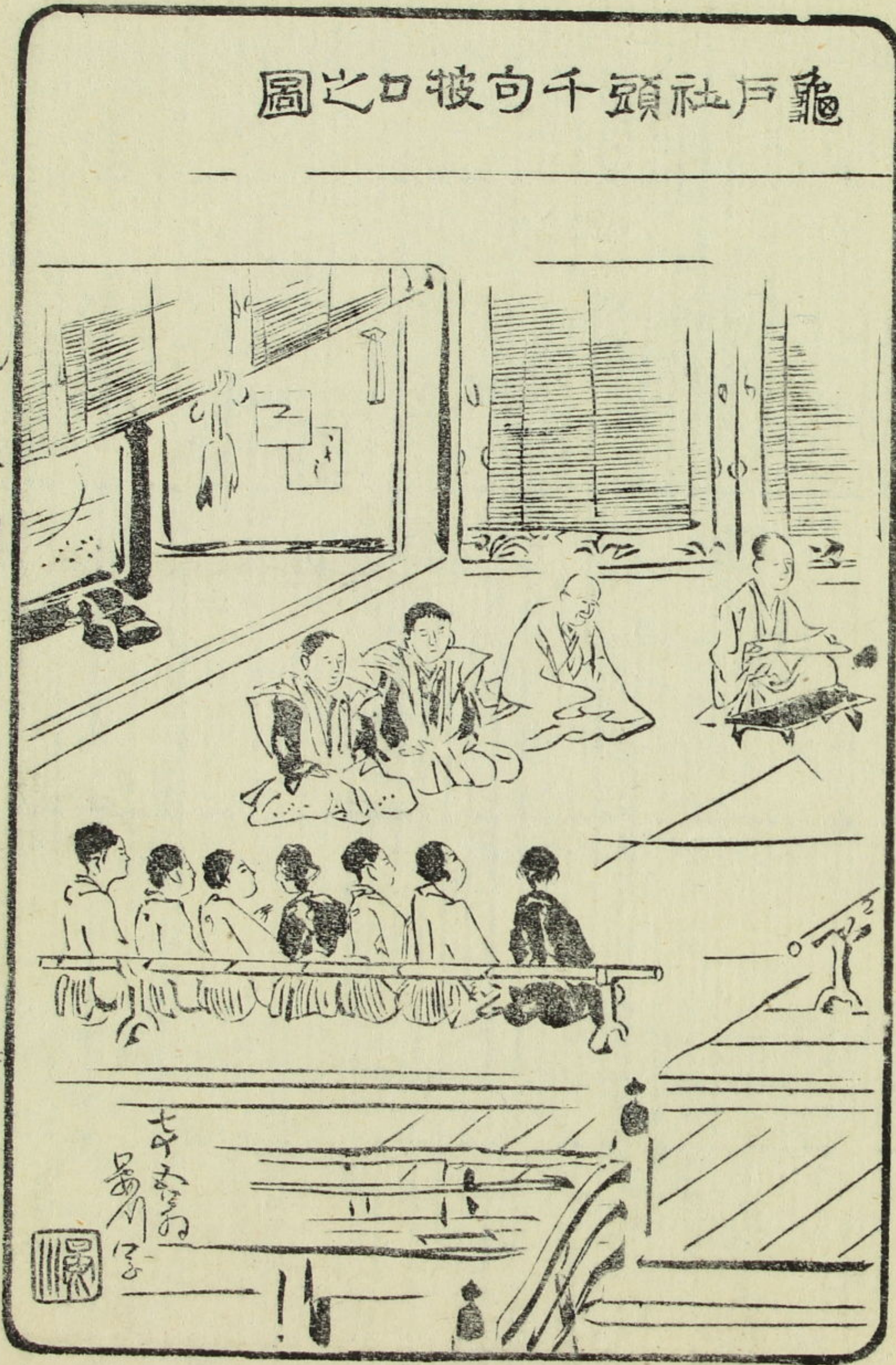
埋て一塊の紅雲を御 けの之は梅也
 のり〜 神を教
 彼銀石の可衣を八廿部樂地
 ようてあ〜此大神の大前より
 千句抄あ〜の二百と一あり
 と日也〜とせよあ〜時あ〜と
 誓旨再拜〜 貞

癸未七月

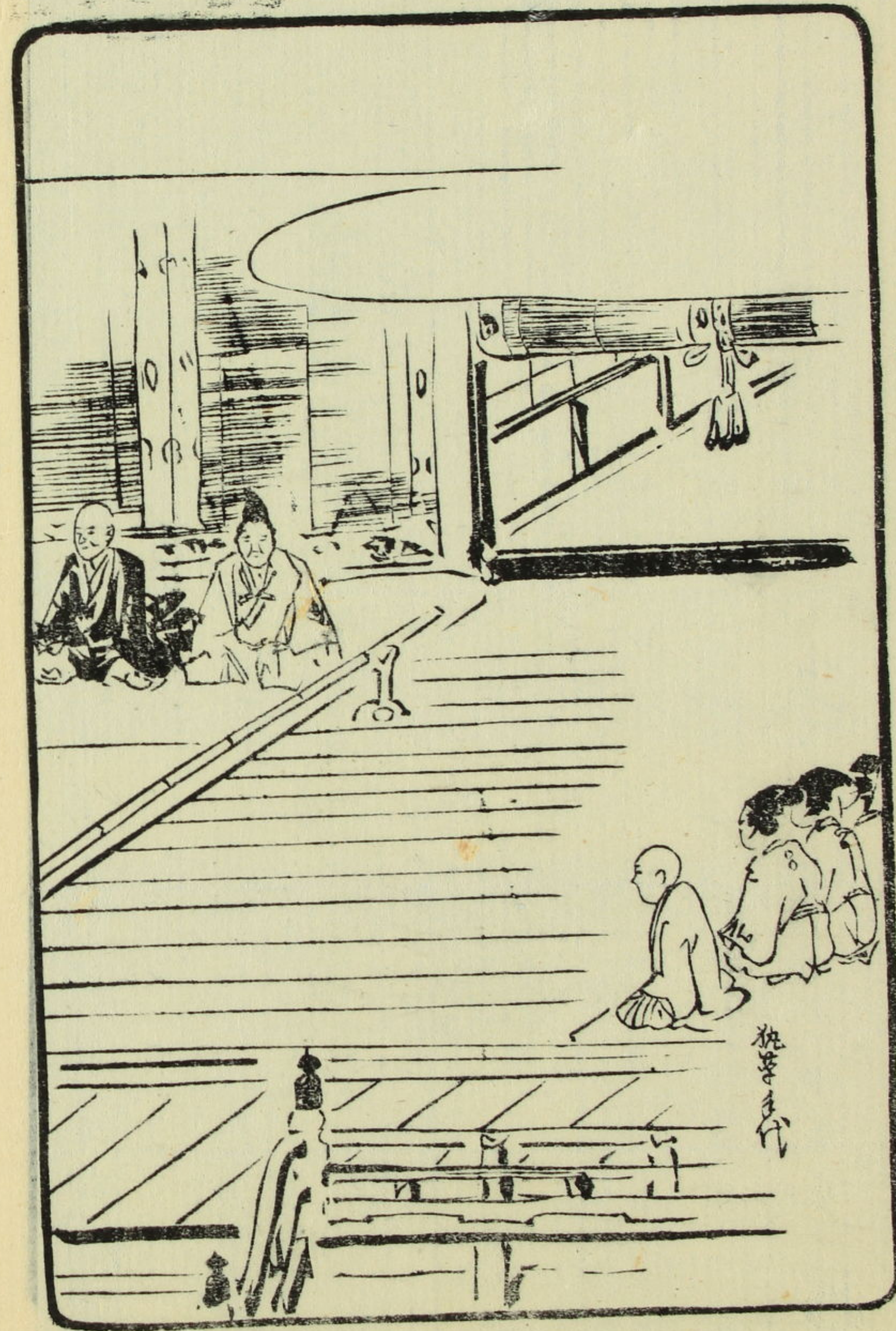
多摩居士印



龜戶社頭千向披口之圖



七十
 長
 印



狹
 葉
 長
 行

龜
 戶
 社
 頭

狹
 葉
 長
 行

龜戸千句

千句塚

永祿五年

裏、羊早、
立人、名、離



龜戸千句

賦何河俳諧

廿五日

永祿

松栢能及冬の一本や神さくらら
 総水うらや言事新 句
 ちささう白濁吹くくくハヒキ
 ののまーいハ手拭をきく
 間仕切又志をらく惜るニ扱お
 冬或は冬にそを扱ニ扱
 心ハくく冬のみすうハ扱ニ扱
 鷹手丸をまはさる幸り

永祿五年
 永祿五年
 永祿五年
 永祿五年
 永祿五年

龜戸千句

かたはたの山ありてくつらふは
世にわたりて人々の心す
山吹の歌の流をわたりて
身も来りてくつらふは
少くもぬれようつすり
遠き山吹の山ありて
さへ口をすつらふは
生きたる甲斐ありて
月明りてありて
懐く山吹の山ありて
樂天の詩ありて

雲 梅 檜 五 太 五 檜 梅 五 太 雲

つらふは山吹の山ありて
花を懐くは山ありて
親と人々の心ありて
年分は山吹の山ありて
よも山吹の山ありて
野に花ありて
外に水ありて
狗に花ありて
傾城の山ありて
多し山吹の山ありて

梅 檜 五 太 五 檜 梅 五 太 雲

龍虎山

二

追来社内中へ焼く小町
 吊物〜門の巻 陸
 磯人の磯人住居の御新より
 氏々の何事と福木細乳
 床の又深き海より月を南
 修む所より新風の吹
 秋風はふ〜とふらぬ深き質
 及青土へ牛とわねと
 白雪の舞をばあ〜の舞を
 あり自寒〜 陸頂の寺
 せら〜の舞をよ〜の舞の白

権 太 五 櫛 宜 五 太 櫛 太 五

三
 山降の笠を舞〜の冠 山り
 藤 怨つ〜を〜の〜
 権を扱ふ水好あるか
 あるに似る大難物なる夕嵐
 袴つけ〜の役〜の〜
 後ある音の〜の〜
 西神酒を〜の〜
 手り〜の〜の〜
 雲と〜の〜
 穿官よりつ向襟の〜
 篠〜の〜

宜 櫛 太 五 宜 五 櫛 太 五

龍 竹 菊

五

ひる老くのや一里いゝ飯者合
降夢部ふせすよきこゝ水
舞あふへり却しくぬる世帯
ここの江戸の年礼やまゝいゝ
着病よる呂利の舟これ履人
飯名ふまゝいゝやまゝいゝ
多雲幕を高き揚る仲の了
重の張糸の強さ 袖下
席掃く呵てゑまゝいゝ
さうよゝいゝ雪降るの今日
何れは泪流さるる自れは

雲 栴 五 太 檝 梅 五 太 雲

減るの減るゝゝゝぬ新の故
三
花とらゝ麴降るの吹付る
向側とゝ遠く不氏神
纏繰る花張る何ものも上総
冬らゝゝゝ水手栴の一掃
お提お出は是れ下なる水空室
貧乏をゝゝゝの^{カキ}禱 をかく
先任の由おて生じて来る者
名ゝゝゝゝゝの如とれと臨
引板の音遠く水り又ゝゝゝ
只も淋しい新をゝゝゝ

栴 五 檝 梅 五 太 雲

龍戸年記

灯のくさし湯島所の出はしきり
 馬寄よ似る谷中芋坂
 暖をとるしつるを以てわりのを
 東屋をよしとてききり争之
 着派しと出ると親世の衣の又
 居つて形うると肩衝をえる
 借錢もつて形をたきりよ
 入るぬ工をたつたるを我
 りふいぬぬつとりの夜立燈して
 木架の湯白く又遠く魚系紀
 よふ飛をよとてをたつたつらき

太 松 五 香 檜 栴 五 香 栴 檜

十

中居うてこをすぬ流しを
 終の華をす心續け引きせ
 志をたつたるを津のあや
 産物の松も葉く杖踏く
 茶碗おひたすをたつたる
 とたつたるをたつたるの内り自
 下りらるるをたつたるを
 風号あつた津村系をたつたる
 従ふる葉のつたるをたつたる
 産物の松も葉く杖踏く
 ちやてのたつたるをたつたる

巨 石 五 栴 香 檜 栴 太 香 五 檜

新編千載

新編千載

源氏物語

魁北阿のりわ葦の物くさけ

あらく静年あふふ起音

物先をのけても七の世さうり

ぬもつらさぬ出代の者か

五 七 雲 檄

永祿十九 静五十九 右年十七

予雲十八 栝束十八 青宜四

紫衣四 巨石一

賦風何 第二

明くは夜のおとさしききく

兵にまきたの床撫く多

隣より大飯情を重た寤寤

立おろし子年葉ふあて

柳竹の朽く河の舟を片下り

順よく黄ふ棧あふ年

結のまゝの悔情忍て夢は白

長い暑はとる所れ

梅年

永 檄
予 雲
静 五
太 年
梅
雲

源氏物語

源氏物語

畏原方のお撲社心象を也
 神と佛のすり阿ふ園
 街名を隣々如捕社五ッ抱へ
 一畝植々ひるまふ去る
 如り如く定ふ初縁の縁のま
 いろは社むうーとて石
 此縁社如くありよけきい又お世
 相の空神社くろきまふさり
 岸空やすぬ望山の名よ明て
 縁ふふをふふ中をう宋漢
 兵法社縁如くまふを愛おくら

五 雲 機 括 太 五 壺 機 括 太 五

備社社冠をふらり安んぬ
 龍くよ春の夕暮の水こまを
 少雀の子如くくくくくく
 赤根代よ足りる斗の鈴をて
 控てとまう妙ぬむまうり 如敷
 針笑いたるあふの入ととと
 出るとま原木をるよ河を
 啼ふふいよく時 如りの時を
 如刺を如くよ如く如く如く
 如意袋人い縁てうを如てふ
 如冷社天守を如之りり

太 五 壺 機 括 太 五 雲 機 括 太

姑少して扶好すまひの聲を
編好しつら見えの景響
ふ似る如物多ふく家火火
面依れまひるものさあし
言足然自らまひるいひえんま
婦いつらりと家あつた
お衆りと何つていへる腕つら
長生をすの侍候法とい
振分好有斗多う心算輝ひ
志ららしめるあつたの宴
常代と冠を於花社を是

青 宜 撤
太 五 雲 撤 梅 宜
太 五 雲 撤 梅 宜

茶揚さつりの肉いひのそを
めつりまうりか味候可く向ら
心よりいへるそを所一全
臨らすおえらる候も寒の自
古を所いへるものつら
まらさの中よまらる男海
案に耐あまのうらな書也
親の居よ替らるいと早舟より
侍候志を撰しつらまら
法らまらるる松入取をいひ
古者よとあつた候

太 五 雲 撤 梅 宜
太 五 雲 撤 梅 宜
太 五 雲 撤 梅 宜

龍門抄

八

三世の後の後より云々長の事
 亦此の如く云々
 元の事ハ其の身より云々
 亦ん此の如く云々
 廻極と茶漬年此の如く
 立入年又此の如く
 而の如く此の如く
 其の如く此の如く
 其の如く此の如く
 其の如く此の如く
 其の如く此の如く

雲 梅 志 五 檝 雲 栝 太 五 檝 雲

三ウ

形の如く云々
 此て其の縁縁如く云々
 此は骨肉と此の如く
 此縁云々此縁の上此切刻と
 此云々此云々此云々
 此云々此云々此云々
 此云々此云々此云々
 此云々此云々此云々
 此云々此云々此云々
 此云々此云々此云々
 此云々此云々此云々

檝 雲 栝 太 五 檝 雲 栝 太 五 檝 雲

龍心行詞

龍心

空茶の下葉少あまをたぐり
 さらうらまをとりては餅を
 多く餅酒飲三日身を醒すらん
 梅くら先々元能刺宿
 西條は寝言水の冷め終や
 新十の昔は梅まうらうら
 仕合の牛の箱立てりし如し
 梅とよしの梅も深山 水
 吾能いすゝ籠への巻ひりの
 日永くかえ梅^{ホウ}梅^ツ真茶
 史のそはまをくくは唐のまを

五 太 梅 電 撒 五 右 梅 香 機 雪

よいとありのあゝ娘を初と糸
 纏の袴下もく梅^{ホウ}梅^ツ真茶
 及らうらまをとりては餅を
 付茶とよしの梅まうらうら
 梅くら先々元能刺宿
 西條は寝言水の冷め終や
 新十の昔は梅まうらうら
 仕合の牛の箱立てりし如し
 梅とよしの梅も深山 水
 吾能いすゝ籠への巻ひりの
 日永くかえ梅^{ホウ}梅^ツ真茶
 史のそはまをくくは唐のまを

五 太 梅 電 撒 五 右 梅 香 機 雪

新編

新編

汗の着ぬききりたりと云ふ是れ
昔の如く明けたりと云ふ是れ
と云ふ交て物便重の御上
さすは都の春の只中

五 太 五

梅年十八 永檄二十 年云十六
御五十九 太年十八 者宜四
雲香三

賦何整 第三

是等て水を以て其花を
梅よりつらりと多始の巻
能く其花の如く其花の如く
阿多其花の如く其花の如く
今檄の國は其花の如く其花の如く
其花の如く其花の如く其花の如く
其花の如く其花の如く其花の如く
其花の如く其花の如く其花の如く

予雲

太年 梅年 永檄 御五 太 梅

御産十書

御産十書

合止の難末てよおきおちて
 幾守おとむと一山の中ら
 物としてさしけつて孫の孫り
 度人知ららふの事おち
 自らいふ取付後おまゝ二階
 第の外終てたおめとて
 二子 波きまへおちて船のひらりと
 船の船古くつめいこの
 ちかけまいつ寸多程お珊瑚抹
 者中らいつそのけのお終
 とも海お末のよまおるあり

香 宜 太 宜 五 櫛 太 宜 五 櫛
 香 宜 太 宜 五 櫛 太 宜 五 櫛

三

おそい肥生お船おちて
 少向の山を寒くおちて
 ちとらしおちておちて
 山程よりこいおちておちて
 生こよよおちておちて
 船おちておちておちて
 山程よりこいおちておちて
 水音おちておちておちて
 山程よりこいおちておちて
 山程よりこいおちておちて

櫛 太 宜 五 櫛 太 宜 五 櫛
 櫛 太 宜 五 櫛 太 宜 五 櫛

知りてせぬ人の見こころを悉く
 うちんとし拵てく脱多弱下結
 細ま結糸文智小暗化りて
 ところせつをや結る田文
 日くらしの中うま暗るの粒光出
 風聲を結る結る結る
 儲け運山所と他い云結あり
 好まの結る見する案
 板一重下を結結の結る
 甲子子結る結る結る
 結る結る月の結る結る

五 太 橋 檣 五 太 橋 檣 五 太 橋 檣

三ツ

結る結る月の結る結る
 葉林小結る結る結る
 とそ者らし心あ結る
 三板の瓦雲進い大且結
 結る結る結る結る
 照りて結る結る結る
 結る結る結る結る
 結る結る結る結る
 結る結る結る結る
 結る結る結る結る

五 太 橋 檣 五 太 橋 檣 五 太 橋 檣

此ふさあいの女ふははの男を
 終を遠く慕ふ水さか
 泉の清る竹よりたれを
 みるをぐり能く志を
 只ひより竹より名勝の空
 菊の清る水さか
 泥垢ふからる竹より
 せんさくしてすくま
 芳くふりて水さか
 経木あらしく糖のこ
 くの竹より水さか

雲 栴 太 五 機 栴 太 五 雲

海に舟をたれをふりて
 此の竹よりたれを
 せんさくしてすくま
 芳くふりて水さか
 経木あらしく糖のこ
 くの竹より水さか

機 雲 五 栴 太 五 機 栴 太 五 雲

藤原抄

十四

雲霧の又運ひて雲の終り
別ふふふふふふふふ
庭をばふ庭の上を花日如
順ふく順ふ味斗一也

雲 五 太 松

予雲二十太年十九梅年十九
永撤十八新五十八青垣三
雲書三

賦何笠 第四

廿八日

ふふふふふふふふふふ
松ふふふふふふふふ
宗經の蝶舞別る雲書
飛ふふの狸形見え世よ
西吹けの東よあそび
杖て別るの片雲
屯ふふふふふふふふ
山の雲ふふふふふ

新 五
梅 年
永 撤
太 年
予 雲
五
松 撤

古の海より遠く離れぬまゝと望
 去る處より掃く年を待たず
 何處のあまを刺久し一夜にけ
 づてそをめで法松を知ら
 空より如心しとそを出 掃
 傍案中から出たりいふ
 うつらまのふよき思ぬそを空
 中より如心のあまをわす
 樹の空より而下りし法松水
 うらや歌のふよき思ぬそを
 空より掃く年を待たず

塙 雲 栴 太 五 機 宜 栴 聖 太 撒

三

四月廿九日 雨音
 大切なる事 命は死に別
 極子儀市の遠き人なり
 命はくは 命はくは 命はくは
 筑波のあまを刺久し一夜に
 空より如心のあまをわす
 小粒のふよき思ぬそを空
 中より掃く年を待たず
 麻売の海より遠く離れぬま
 去る處より掃く年を待たず

五 栴 宜 太 雲 栴 五 太 宜 栴

其陽之... 履を履て...
 取寄ぬ... 命を...
 小生... 履...
 二月... 履...
 足... 履...
 着心... 履...
 神... 履...
 宿... 履...
 係... 履...
 位... 履...
 用... 履...

宜 撤 五 重 梅 宜 太 五 撤 五 重

卯... 宜...
 粟... 宜...
 都... 宜...
 名... 宜...
 名... 宜...
 名... 宜...

宜 撤 五 重 梅 宜 太 五 撤 五 重

元日 皇女 喜多子 成より
御汲 込 新 新 皇 号
いり 皇女 喜多子 皇女 喜多子
上皇 喜多子 皇女 喜多子 中

五 撮 孫 太

新 五十六 梅年十六 永撮十六
六条十五 予雲十三 雲雲四
青直十一 松堀七 碧海二

賦何姫 第五

葉 峯 吹 絞 山 松
如 終 々 暮 暮 暮 暮 暮 暮
鯛 鱈 本 市 引 引 引 引 引 引
響 出 出 出 出 出 出
ひ び び び び び び び び
海 海 海 海 海 海 海 海
新 新 新 新 新 新 新 新
夏 夏 夏 夏 夏 夏 夏 夏

太年

予雲 孫五 永撮 梅年 太 五

行かしの鞠の結者古結久遠
 昔の四の藤、刺出を
 事に入らぬ、おろふ不惣入當
 そのの案い、望以念性
 悉作のそくぬ、華結結ひ中
 おろふ所て、休むか原未
 菩提寺の安附、又白のけり
 母屋て、華、飯の流きよ
 と、おろふそ、遠こと、おろふ、夕
 持、扇い、持て、刺、切
 是といふ、事、おろふ、と、室、市

松 堀 五 堂 太 極 五 堂 太 極 堀
 松 堀 五 堂 太 極 五 堂 太 極 堀

二

出、人、の、出、て、い、ま、う、ひ、り、流
 長、ひ、ま、い、り、お、ろ、ふ、情、の、せ、分
 夏、の、結、録、を、結、お、ろ、ふ、蝶、々
 僅、ま、て、春、の、後、ま、て、子、任、表
 夕、暮、後、結、者、魚、不、以、く
 蝶、の、舞、を、祝、う、と、大、の、節、也
 切、片、結、録、の、吹、け、を、お、ろ、ふ、若
 冬、の、雪、を、空、洞、強、才、と、お、ろ、ふ、策
 松、の、竹、り、結、の、時、を、お、ろ、ふ、事
 酒、造、り、梅、子、を、結、お、ろ、ふ、刺、を
 狼、の、の、り、結、お、ろ、ふ、事

青 宜 堀 宜 堀 五 機 宜 堀 五 機 堀
 青 宜 堀 宜 堀 五 機 宜 堀 五 機 堀

扇搦よお猪の折世のうらり
 男のうらけと髪をうらり
 美は祿者の寄はふまなり
 よまのうらけと髪をうらり
 生ぬまよ石の神は付授る
 それといふまよと髪をうらり
 戸隠の石札折りの其は
 髪をうらり髪をうらり
 搦て何の折よと髪をうらり
 髪をうらり髪をうらり
 髪をうらり髪をうらり

太 五 宜 務 冬 太 搦 宜 五 宜 務

扇搦よお猪の折世のうらり
 男のうらけと髪をうらり
 美は祿者の寄はふまなり
 よまのうらけと髪をうらり
 生ぬまよ石の神は付授る
 それといふまよと髪をうらり
 戸隠の石札折りの其は
 髪をうらり髪をうらり
 搦て何の折よと髪をうらり
 髪をうらり髪をうらり
 髪をうらり髪をうらり

太 五 宜 務 冬 太 搦 宜 五 宜 務

此水より海へ流るる井の状
其の深さのとおもふ所
花籠箱の積り札のけ
姑洗定石の形

梅電機梅

天保十四年雲十六
永禄十五年拾年十六
去宜十二碧海二

明治十一年

270

